方言退化現象の一考察

——鹿持雅澄の「幡多方言」について——

(1)

昨年二月から三月にかけて鹿持雅澄翁の「幡多方言」（一八三四年記録と推定）に列記してある幡多方言三一七語（三一八語のうち、タマスイという語を調査の際に脱漏）について、一二六年後の現在なお使用せられているかどうかを調査した。

調査の方法は、三一七語の方言を書いたプリントを配布し、その方言を聞いたり使ったりしたことがあれば○印、なければ×印をつけてもらうという簡単なものであった。

調査対象は、私が授業を担当していた中村高等学校二年生九八名と、同僚二六名、知人から依頼してもらった二一名、生徒の祖父母一一名、直接私から依頼した老人二名、合わせて一五八名であった。

人によって、一つ一つの方言の受けとり方に、いろいろの相違があり、巾があるのはいうまでもないが、その極端なものを除けば、統計的処置の基礎とすることができると思うので、統計上の便宜も考え合わして、次のように調査資料を整理した。

まず、九八名の生徒の中で、居住地に移動の多かった者、資料の記入の粗雑な者を除いて八〇名を残した。同僚二六名の中、郡外の六名を除き、前記生徒八〇名といっしょにした一〇〇名の分を統計資料にした。みな、結果の不審な点は本人に当って一応点検することができたものである。

(2)

三一七語を動詞（五四語）、形容詞（一四語）、助詞（三語）、副詞（二五語）、名詞（二二一語）に分類し、一語一語についての点検の結果を統計的に処理して、回答延数と調査延数との比率を出したのが第一表であり、回答の密度の分散傾向を知るために、各語の回答者数を一〇段階に分類したのが第二表である。

第一表によって判断できることは次の四点である。

(一) 生徒より同僚の方が回答率が高い。

(二) 副詞・形容詞が、名詞・動詞より回答率が高い。

(三) 回答率の順序は、生徒の方が助詞・副詞・形容詞・動詞・名詞となっており、同僚の方は助詞・形容詞・副詞・名詞・動詞となっている。

第　一　表

回答率 / 品詞	調査語数	生徒（80名）			同僚（20名）			計（100名）		
		調査延数	回答延数	%	調査延数	回答延数	%	調査延数	回答延数	%
動詞	54	4320	1535	35.53	1080	408	37.78	5400	1943	35.98
形容詞	14	1120	463	41.34	280	148	52.86	1400	611	43.64
副詞	25	2000	836	41.80	500	238	47.60	2500	1074	42.96
助詞	3	240	121	50.42	60	33	55.00	300	154	51.33
名詞	221	17680	5780	32.69	4420	1723	38.98	22100	7503	33.95
計	317	25360	8735	34.44	6340	2550	40.32	31700	11285	35.60

第　二　表

	回答数 / 品詞	0—9	10—19	20—29	30—39	40—49	50—59	60—69	70—79	80—89	90—100	合計
甲	動詞	20	7	1	5	3	2	4	1	2	9	54
	形容詞	4	1	0	3	1	0	0	1	1	3	14
	副詞	7	3	1	2	0	1	3	1	5	2	25
	助詞	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	3
	名詞	79	26	17	17	11	15	13	10	10	23	221
	計	110	38	19	27	15	19	20	13	19	37	317
乙	動詞	20	16				18					54
	形容詞	4	5				5					14
	副詞	7	6				12					25
	助詞	0	1				2					3
	名詞	79	61				71					221
	計	110	99				108					317

㈣　生徒同僚合わせて一〇〇名の総回答延数は一一、二八五語であり、総調査延数三一、七〇〇語に対して回答率は三五・六〇％である。

㈠は若い世代ほど方言、特に古い方言を知らないことを、数字の上が確認しているのである。

㈡は、語彙が多く、かつ使用度の多い名詞・動詞は、その退化率が副詞・形容詞よりも高いことを示している。常識から言えば、使用度の多いことばほどその寿命が長いはずであるが、そうした事実の反面において、使用度が多ければ多い程、その本来の性格を変えたり、形態を変えたりする度合いも強いわけで、ことばといえども消耗による退化の原則からは外れていないのである。

㈢は、年齢によって使用することばの内容に推移があることを物語っている。もちろんこれは同僚と生徒を別々に、それぞれどの品詞を多く使用する傾向があるかを見た結果を比較した上での立論であるから、消極的な意味しか持っていない。

同僚の方が、生徒に比べて、動詞より名詞、副詞より形容詞の回答率が高いことは、言語生活の積み重ねによって堆積する方言語彙は、動詞的な動きのあるもの（動詞とそれを修飾する副詞）よりも名詞的な固定的静的なもの（名詞とそれを修飾する形容詞）が比較的多くなる傾向があることを示していると思う。

㈣については、昭和三二年五月、「日本文学研究」創刊号に発表した「鹿持雅澄の『幡多方言』と現在の幡多方言との比較考察」という拙論で、「言語は一世紀間にその約三分の一を改変する」という結論を下したのであったが、私個人の方言生活を基準にして下したこの常識的な結論が（その過程においては当時と多少見解の差異はあるけれど）一〇〇名の調査人員の回答率が三五・六〇％となっている事実から考えて、一応妥当であったことを証明してくれていると思う。

(3)

第二表によって取り上げたいのは次の三点である。

㈠　回答数を一〇段階別に整理すると、両端が目立って多く、その中間はほぼ平均化されている。

㈡　九〇％以上三七語に対し、九％以下は一一〇語であり、前者の三倍に当る。

㈢　九％以下を廃語、五〇％以上を一般的通用語として考えると、その比率は一一〇対一〇八となり、ほぼ同数である。そしてその両者の中間語（一〇％―四九％）が九九語で、これも全体の三分の一に近い数字を示している。

㈠によって、方言の退化現象は、その進行過程においては平均した速度をもって進行していることを知ることができる。ただある特殊の方言はこの退化現象に強力に抵抗して、昔ながらの生命を保っているが、それの約三倍に当る方言が、この退化現象の洗礼をうけて、廃語の運命に甘んじていることが㈡によって知られる。

㈢の廃語・一般的通用語・中間語の区分のしかたは絶対的なものではないが、第一表の回答率ともにらみ合わせて、もし分ける

とすると、ここらあたりが無難なものではあるまいか。

前記第一表の説明で述べた「日本文学研究」創刊号における結論（言語は一世紀間にその約三分の一を改変する）の基礎は、

A　現在も一般に広く使用している言葉、

B　あまり使用はしないが、とにかく適用語として残っている言葉、

C　雅澄翁の伝えた意味では全く使用していない言葉、

の基準に従って分類した数字、一〇四語（A）、一〇七語（B）、一〇六語（C）であった。これを第二表乙の計の数字一〇八対九九対一一〇と比較してみる。

両者の間に、三段階に属する方言の出入りがあるのはいうまでもないことであり、その分類の標準も違い、結果の語数の比率にも多少の相違はあるが、複雑な方言退化現象を考察する場合の一つの根拠となる共通点があることは否定されないと思う。

(4)

次は、九〇%以上の回答率の高い方言について点検してみることにする。

動詞九語のうち、三語（イク、タマグタ、ダク）、名詞二三語のうち七語（ネンネ、ベベ、ノコ、オノレ、マネ、カカ、コムラ）は全国的に広く通用しており、動詞の三語（ツツク、ハマル、タゴル）、名詞の一二語（ビンビ、トイトイ、イタヅリ、アイ、マンマ、ネンネ《赤子》、ヒヂコ、チャブチャブ、タマゲ、スネノサラ、テンテ、ブンブ）、形容詞の三語（チンマイ、オトロシ《恐し》、オトロシ《驚嘆》）、副詞二語のうち一語（ポッチリ）計一九語は相当広い使用範囲を持った語であり、その方言領域が幡多郡に限られた語ではない。つまり、九〇%以上三七語のうち二九語までが正確な意味では幡多方言とは言うことができないものである。従って、雅澄翁の方言意識に偏向があったのではないかという疑問が湧いてくる。

しかし、これについては翁自身もすでに気づかれていたのであった。「コレモ一国ノ方言ナリ」とか、「コレハ一国併ニ他邦ニモ通メイフ詞モアルベシ」とかいう注があるところをみると、方言の全国的な分布の不明であった当時としては、相当に広い言語的視野に立って「幡多方言」が書かれたことを知ることができる。

(5)

九〇%以上三七語のうち、名詞が二三語、その半数近い一〇語が幼児語である。チャブチャブのような原始的な擬声語、大人のことばに愛らしい響を持たせて繰り返したビンビ、ブンブ、トイトイ、ネンネ、マンマ、ゼンゼ、テンテ等の構成をとりあげて考えれば、幼児語のあり方の根本条件が提示されているということができる。

幼児語の新陳代謝は普通語ほどではないが、それでも時代とともに流転してゆくことは「幡多方言」の末尾に小児語としてまとめて掲げてあるもののうち、回答率が五〇%以上が二〇語、それ以下が二〇語となり、更にその半数の一〇語が九%以下の回答率であることによっても知られる。

回答率の少い幼児語は、マトグ、オオテのように幼児の用いる幼児語でないもの、ニョウニョウサマ、タウト、ノンノのように生活様式や宗教観の変化によると思われるものもあるが、最も根本的なものとしては幼児特有の愛らしい響きが欠けていたり、そのものずばりの性格を表現する点に難があるものとして、エエヤイ、ビイ、カッコ、ヅウなどを挙げなければならない。

(6)

回答率九%以下の一一〇語は、廃語ないしはそれに近い生命力の枯渇した方言と見るべきであろう。

これを品詞別にしてみると、動詞二〇、形容詞四、副詞七、名詞七九となり、その各品詞総数に対する比率は、動詞三七・〇四%、形容詞二八・七五%、副詞二八%、名詞三五・七五%である。この場合はパーセンテージの高いものほど、その品詞の退化率が高いことを示しているのだから、動詞や名詞は、形容詞や副詞に比べて退化傾向が強いことを証明しているわけである。これは第一表の㈠の説明の結果とも一致している。

次に、各品詞別に簡単に点検してみよう。

(7)

㈠ 動詞

二〇語のうち、回答ゼロがトメカサカル、ヒョロケタ、草刈ガデキタ、思ヒヤッテゴザレ、ガッチョル、楽シキ、雨ガオテコケル、オケツメテアッタ、オテル、ウフ、マトグ、オチルの一二語である。残りの八語は、ナイガユル（1）、田植ガデキタ（1）、ヒカル（1）、スベル（3）、ハイリダレ（4）、常ノ体ニテモゴザラヌ（4）、達者ヲスル（4）、ヤセガウタ（5）、――（）の中の数字は回答数を示す（以下準用）――である。

達者ヲスル（現在は「達者ニナル」）、ハイリダレ、オチル以外は、臨地調査に出かけてもなかなか聞きつけることができない。

㈡ 形容詞

イチウツイ（0）、コハイ（2）、ギャウニ暑イ（5）、ギャウニ寒イ（7）、の四語である。臨地調査の結果は、この数字とは逆であって、大正町下津井部落や、その上流の高岡字欅原村でイチウツイ（現地ではイチブツイという）を採集することができたが、他の三語の実在を確めることはできなかった。

回答者である生徒や同僚にただした結果も非常にあいまいなものであり、全面的に否定しないので、記入の際の判断を尊重して、とにかく回答数の中に残したものの、「そのいうことばを聞いたような気がするので○印をつけた」というたよりないものである。

㈢ 副詞

ゼッピ（0）、ボッコウ（0）、ジャウニ（0）、ジャウラケ（0）、ジャウラカ（0）、一ヒビリ（0）、デンデ（4）の七語である。

㈣ 名詞

七九のうち、回答ゼロが二四語、そのうち、カヤリ、ヂヤウモン、ムメイ、カヂンサマ、ホリコ、ウチコ、トモノ、コヅキ、タイタミ、スマヒ、チウヨウ、トリイダシ、オヤット、チヤウギの

一四語については、まだその存在を確めることができない。

カヂンドノ、アシヤミ、ナムサン、イザキ、カオイ、ヤス、ヨウヅ、イヘ、スマナ、ドントは、童謡や禁忌のことばの中に形だけをとどめているものと、生活語として今もなお使われているものとあるが、概して山間僻地に局部的に残されていることが多い。

回答のあった五五語（回答率九%以下）のうち、ガイル（1）、サラカブ（1）、医者ンドノ（1）、バインドノ（1）、シユウトンドノ（2）、馬医ンサマ（2）、ネツ（2）、アニンドノ（3）、ヒキマタ（4）、孫ンドノ（4）、ムスコンドノ（5）、アネンドノ（5）、ババンドノ（6）、ヲヂンドノ（8）、以上一四語は報告者自身にも確信のないものが多いし、私自身もまだはっきりつかむことができない方言である。

マトギ（1）、イヨカ（1）、イチビ（3）、クンゼ（5）は山間地域に、ガンザウ（1）、スカ（1）、親ニラミ（3）、ナムラ（5）は海岸地域に残っているが、このうちクンゼ、スカ、ナムラは、今でも相当生活力の強い方言である。

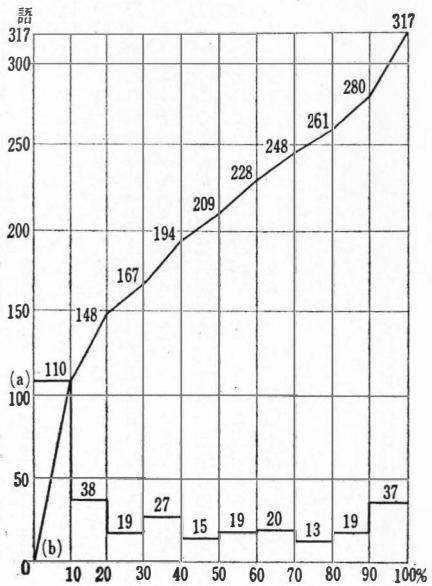
上記の方言も含めて、時代の波に洗われ、住民の生活に結びつくことができなくなったために、まったく忘れかけられている方言はサシコシ（1）、坂ノ下（1）、油ヂヤウヅ（2）、オヤク（2）、ビイ（3）、ヒキマタ（4）、コウヤ（4）、カッコ（4）、タイ（6）、ヅウ（6）、ホシカケ（7）、ハラカゼ（7）、ヨメンドノ（8）、オドリ（9）であり、音韻転訛が共通語の普及によって矯正されたものに、ウエ（2）、ヨボシ（4）、ヒリメシ（4）、ウグユス（5）があり、古語を残しているものに、セウジ（1）、ニョウニョウサマ（4）、サイツイ（7）、野分ケ（7）、カシマダチ（7）、タウト（7）、セガケ（8）、ノンノ（8）がある。

また、局地的に行われているために回答数の少いものにヨゴシ（1）、ベラベラ（2）があり、農漁村において広く用いられてはいるが、年配の高い者に限られているのが、エエヤイ（2）、アイサマ（6）、アイヨサマ（6）、王手（6）、ハナノ頃（8）である。

(8)

第二表の甲をグラフにして、この小論をまとめることにする。

第三表



一〇段階の回答数を比較して、横に並べた棒グラフの突端を結んだのが(a)線であり、積み重ねて、退化現象を一つの傾斜として示したのが(b)線である。

これは、一二六年間に退化した幡多方言三一七語の総合的な退化現象の見取図である。

このグラフで第一に取り上げたいのは、一〇%ごとに一〇段階に区分した回答数相互の比較である。これによって退化現象の進行してゆく過程を見ることができるからである。(b)線が示しているとおり、九〇%から二〇%までは大体平均しており、直線的な傾斜になっているが、二〇%以下は急激な下降線を描いている。人間の死亡率が五五才以降老齢になるにつれて急激に増大する現象と類似していて興味深いものがある。

次に問題になるのは、棒グラフの(a)線に見る両極端の比較である。九〇%以上三七語に対し、九以%下一一〇語という相違である。一二六年の時間の流れに抵抗して根強く生き残っている生活語に対して、はかなく消滅してゆくことばが三倍もあるという事実である。その極端な場合としての一〇〇%語と〇%語の比率は三対四三となっている。これをこのまま肯定するのは危険であるが、それにしても、この数字は、言語の新陳代謝が普通に考えられているよりもずっと激しいものがあることを物語っている。

第三に問題になるのは、九〇%以上の棒グラフの高さである。どうしてここがこんなに高いのであろうか。

前に述べたように、言語の新陳代謝は想像以上に激しいものがあるのだが、その反面において、ある特定の条件を備えた言語には、時流を越えた半永久的な持続性があることを、これは示しているのである。そして、その持続性の第一の条件は(4)で説明した全国的に根を張ったことば、あるいはそれほどでなくても相当に広い領域を持った生活語でなくてはならないということである。

方言領域の狭い方言、いわゆる狭い意味で用いられる方言（俚言）は、この点からみて、持続性が乏しいということになる。

従って、ここにとりあげた「幡多方言」三一七語の退化現象は共通語のそれよりも相当速度が早いということが考えられる。

（一九六一、七、三〇　浜田数義）